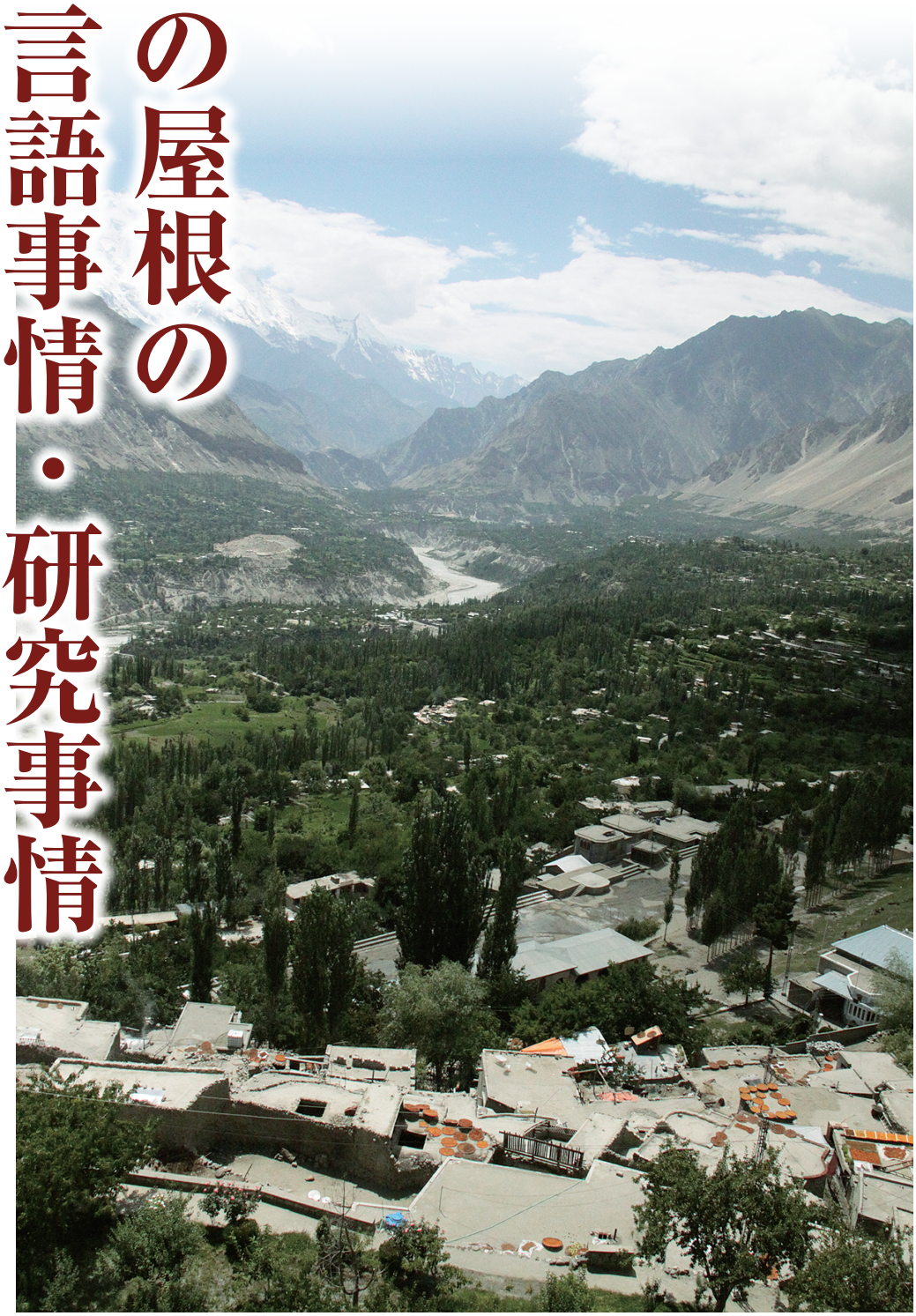
評論 展望

世界の屋根の言語事情・研究事情

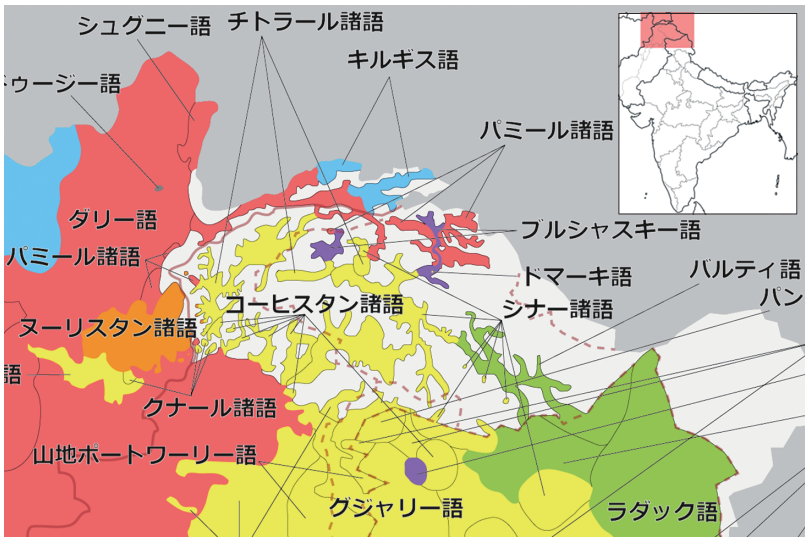
系統を越えた言語接触の現場

文・写真 吉岡（よしおか） 乾（のぼる）

現在、筆者が記述言語学的にフィールド調査をしている対象言語は、おもに次の３つである：ブルシャスキー語（孤立語）；ドマーキ語（インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド語派中央グループ）；シナー語（同語派北西グループ）。



カラコルム山脈の中で暮らす（2014年８月、フンザ谷カリマバード村）。



系統で色分けしたパキスタン北部の言語分布図（民博南アジア展示場の言語地図一部、筆者作成）。

言語学のアンバランスな研究事情

言語学においては、世界に数千ある言語は全て等しい価値を持っていると考えられる。言語の間に優劣などなく、どれもが分け隔てなく価値高いものであるというのが大前提なのである。けれども、そうは言いつつ、言語学者が研究対象としている言語を見てみると、露骨なアンバランスさがある。所謂「メジャー言語」に人気が集中しており、「マイナー言語」なんかには一瞥もくれない、という研究者も多い。結局は言語学界であっても、一部に英語至上主義がのさばっていたりして、言語の平等性は何処へ消えたのかと思える時がある。

個別の言語を研究しようとした場合には、看過できない環境の有利不利がある。文字があって、何億語もの電子コーパス（自然言語の実例データの集積体）があって、随所に分布していて、話者がたくさん、という言語と、文字もなく、談話資料もなく、交通環境の悪い「僻地」の集落だけで僅かな話者がほそぼそと暮らしている、という言語とでは、どう考えても前者の方が研究し易い。もちろん、前者と後者とで研究アプローチなども変わり得はするのだが、それにしても難易度の差は明白である。研究の好みを差し引いても、研究環境に恵まれている言語を対象にした方が、業績も上げ易ければ、相談相手も多いし、研究室の中だけで研究ができたりもして、有利なのである。

では、誰もが、研究環境的に不利な「マイナー言語」から目を背けてしまって良いのだろうか。そういった言語は、言語状況的にも不利な場合がほとんどであるだろう。大きな言語に淘汰され、消滅してしまう可能性が高い。話者数億人の言語と話者数人の言語、一般的な価値感覚では前者の消失は後者の消失よりも大変なことであると考えるかも知れないが、言語学者である以上は、そこに差を覚えてしまっては失格である。けれどもアンバランスな状況は厳然とある。これは、多くの研究者が、他人任せにして甘えているだけなのではないだろうか。

これは言い過ぎかも知れないが、少なくとも若かりし頃の筆者はそう思い、向こう見ずにフィールド言語学の門戸を叩いた。それまでに身に付けていたウルドゥー語運用能力という手持ちの鍵が合った門は、パキスタン北部に向かって開いた。

パキスタン北部という言語景勝地

世界でもっとも高い山を擁する山脈というものを上から順に挙げると、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンドゥークシ山脈と続くことになる。これら３つの山脈は、パキスタン北部のジャグロトという地で合流している。世界の屋根と言えばどうしてもヒマラヤでエヴェレストで、すなわちネパールだチベットだインド北東部だ、とのイメージが強いだろうが、その屋根は西へ、パキスタン北部や、延いてはアフガニスタンまで脈々と延びているのである。

そんなパキスタン北部は、言語学的にも１つの「景勝地」であると言える。と言うのも、世界でもっとも高い山奥ということで、各方位からさまざまな民族が寄り集まって来ている地だからである。彼らは銘々が独自の民族語を保ちつつ山裾から次第に高地へと、居住空間を広げて来た。今やこの地には、インド・ヨーロッパ語族とシナ・チベット語族とが分布しており、峠の向こうにはテュルク語族もある。インド・ヨーロッパ語族だけを見てもインド・イラン語派の、インド系、イラン系に加え、さらにはまた別のヌーリスタン系までもが入り混じっている。そのような環境の中、上述した大語族の言語と押し合い圧し合いしつつ、系統的孤立語のブルシャスキー語もが話されているのだから、その様相は一大スペクタクルであると評しても過言ではない。

「世界屈指」の駆け出し研究者

そんなにも魅力的に見えるパキスタン北部の言語なのだが、研究者はやはり少ない。

例えば、その名前ばかりが言語学界で有名なブルシャスキー語。文献上でこの言語の存在が初めて登場したのは、19世紀中頃に「カジュナー語（Khajunah）」という名で記されているものである（Cunningham 1854）。その後、19世紀後半に「ブーリシュキ語（Boorishki）」として名が現れ（Biddulph 1880）、言語が本格的に記述されるのは20世紀になってからであった。個別言語の記述研究をする上で1つの目標となるものに、「ボアズの三巻本」と呼ばれる成果形式がある。人類学者としても有名なフランツ・ボアズ（Franz Boas）に端を発するこの形式は、文法書、テキスト集、語彙集の3パートを備えた研究出版方式を意味する。これまでにブルシャスキー語を扱った研究は幾つかあるが、「三巻本」は2つしかない。80年前のLorimer（1935–38）と、20年ほど前のBerger（1998）とである。

けれどもこれは、まだ研究が進んでいる言語の部類に含まれる。筆者が第二の研究対象としたドマーキ語や、第三の対象としたシナー語に関しては、三巻本の類はいまだに作られていない。文法書だけでの出版にしても、有用なものは、シナー語はBailey（1924）・Schmidt and Kohistani（2008）の2冊、ドマーキ語はLorimer（1939）の1冊くらいしかない。

何十年も経ったら言語の姿が随分と変わってしまうであろうことは、例えば戦後の日本語と現代の日本語とを比べて考えてみても分かることであろう。言語記述の手法や機器も、当時と今とではかなり洗練度の違いがある。

こういったパキスタン北部の言語はいずれも、研究者の数が世界全体を見て数人程度である。その中には、先行研究に挙げられているデータを基に研究しているだけの者もいるので、フィールド調査をして記述言語学的に研究をしている数となると、もっと少ない。どう転んでも不安定な政情や、宗教の違いが、そのネックとなっているのではあろうけれども。おそらく、ブルシャスキー語、ドマーキ語、シナー語のどれにしてみても、筆者は字義通りの意味で「世界屈指」のフィールド研究者となってしまっている。もちろん、2015年現在で、日本では唯一の研究者である。研究歴の長いブルシャスキー語でも13年目、シナー語に関しては本格的にスタートしてたったの2年目でしかないのに、あっさりと「先駆者」なのである。こんなに残念なトップランナーもない。どれほど人材が不足しているかが、一目瞭然であろう。

言語連合の勢力圏

さて、そんな風に現状を嘆いているばかりではない。何にせよこの調査地は、景観的には無論のこととして、言語学的にもとても魅力的な場所なのである。

南アジア（インド亜大陸）には、語族だけでも7つのグループが混在している。語派単位で見ればさらに多様である。その一方で、その全域の言語には共通した特徴というものが（言語毎に多寡の差はあれ）幾つもある。同じ系統の言語であれば類似しているのは当然であるが、このように、或る地域内で言語系統を凌いで共通特徴が生じ広まることもあり、こういった現象は、「言語連合（Sprachbund）」という概念で説明される。南アジアの場合には「南アジア言語連合」となる。もちろん、他の地域にもそれは窺うことができ、例えば有名なところでは、「バルカン言語連合」というものがバルカン半島の言語群に想定されている。

パキスタン北部の山岳地帯は、南アジア言語連合圏の北端であると見做せる。例えば、歯音系列と対立した反舌音系列の子音があること、日本語の動詞の「～して」という形（所謂、テ形）に機能が似た接続分詞と呼ばれる副動詞形式の存在、反響語操作の存在とその意味機能の一貫性、能格構文（他動詞目的語と自動詞主語とが同じ形式になり、他動詞主語が別の形式になる格体系）、斜格主語による非意図や所有の表現などが、南アジア的な特徴として、インド南端のドラヴィダ系言語などとも共有されているのである。これは、系統的に孤立しているブルシャスキー語でも、同様である。

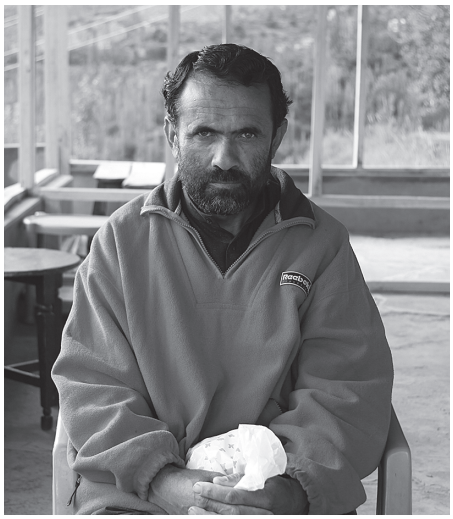
その一方で、地理的にパキスタン北部として筆者が括っている範囲には、その地域特有の共通特徴もある。例えば、20進法の数詞体系、使役構文による非意図的事態の表現、接尾辞による不定単数の標示、コピュラ否定形の形態的な合流などである。チベット系言語のバルティ語から、北西インド系のシナー語、カシミー

リー語、コワール語、イラン系のワヒー語、中央インド系のドマーキ語、ヌーリスタン系のカティ語、孤立語のブルシャスキー語など、系統的に多様な言語群が、その特徴を共有している。

これらの特徴には、いずれの言語から広まったのかが解っているものも解っていないものも含まれている。いずれにしても、隣り合っている言語同士での、あるいは、新しく広まって来た言語と先住言語との間の接触によって拡散した特徴であると考えられるものである。言語は接触により互いに似もするし、話されている内に単独でも変貌して行くものである。文字資料のない言語に関して、過去の言語の姿を知る手立てとしては、現在の姿からの推定によるしかない。方言差が大きければ大きいほど、近親言語の変種が多ければ多いほど、それだけ過去の姿を再建し得る。けれどもこの地域の場合、どの言語も系列言語の分布の末端に位置している。系統的に近い言語との対比でも、そう深く過去に遡れそうにないという点で、苦労も多くなる。

孤立語を眈々と睨む目

繰り返し述べたが、ブルシャスキー語は系統的孤立語である。日本語も、琉球語などの変種はあるけれども、それらを便宜的に忽せにして捉えれば、系統的に孤立した言語の１つに数えられる。日本の周辺を考えてみると、アイヌ語も、朝鮮語も、サハリンやアムール川下流域で話されているニヴフ語も、それぞれが孤立語である。こういった言語は、世界で数十ある。



ブルシャスキー語のストーリーテラー（2009 年 9 月、フンザ谷カリマバード村）。

他の言語と系統的関係性が証明されていない言語である孤立語を見る目は、しかし、バイアスが掛かりがちである。その言語について詳しく知らない研究者から、あるいは時には、詳しい筈の研究者からも、あれやこれやとさまざまな言語に結び付けて系統関係を唱えられる憂き目に遭う。何故だろうか彼ら彼女らは、偏った情報源を過大に信頼し、偏った手法で何等かの「証拠」とやらを算出・産出して、まともに取り組んだこともない孤立語と別の言語との血縁関係を訴えるのである。ブルシャスキー語の現地調査で聞いたことのないような単語を羅列しては、例外ばかりの音対応や意味対応をインド・ヨーロッパ系言語などとの間に幻視し、「これが最終解である」と鼻高になったりする。あるいは、どちらも研究データが少ないのに、ロシア中央のケット語（近年、北米のナ・デネ語族との系統関係が証明された）と同系統だなどと言われたりもする。彼ら彼女らは不思議なことに、専門外の言語の系統関係を見出す野望に憑かれてしまっているようである。

孤立語は、本当に系統的に孤立していたとしても、いつまでも系統「不明」言語と呼ばれ続ける。当然である。他の言語との系統関係が証明できない限りで「孤立」なのだから。系統関係がないことは直接的に証明できない。だからこそ、系統関係（但し、系統的に他の言語と関係性があること）を明らかにしようと目論む主張が後を絶たないのである。対して、それらの主張を一々退ける方からすると、これは堪ったものではない。一応「研究者」が言い出しているだけあって、それぞれの主張は或る程度は筋が通っていることもある。こちらとて、当該言語は専門であっても、結び付けられている先の言語は専門外である。全部を相手にしていたら、フィールド調査に行って自分の研究を進める暇がなくなってしまう。けれども、日本語や朝鮮語のように研究者が多く居る訳でもないので、黙っていてはその何某の主張が正しいものとして広まってしまう可能性がある。何とも恐ろしい話ではないか。ブルシャスキー語と日本語との系統関係の証明だ、などと誰かが言い出したのであれば、即日の内に反駁、否定できるのだが。

亡びゆくドマーキ語を前に

以上に述べて来たような事情を背景として、筆者の研究の今後の展望を述べて行きたいと思う。

まず一つ目は、消滅危機言語であるドマーキ語の記述、記録である。

ドマーキ語は、所謂「ジプシー」と呼ばれて来ていたロマ人などと同じ系統の民族、ドマ人の言語である。ロマ人は8～10世紀頃にインド北西部から流浪を始め、やがてヨーロッパにまで生活圏を移した（今なお移動を続けているグループもある）民族であるが、ドマ人はおそらくその移動の初期段階で本流から離れ、パキスタン北部に定住したグループなのではないかと考えられる。彼らの生業は、ロマ人と同じく、音楽と鍛冶である。パキスタン北部にはさまざまな民族が入り混じって暮らしているが、今でも祝祭や結婚式などで音楽が必要とされると、各地に住んでいるドマ人の楽団が呼ばれる。そういった理由もあってドマ人は小さな集団を作って離れ離れで暮らしており、集団が小規模であったからこそ、民族語であるドマーキ語を失って来ている。今ではドマーキ語を日用している話者はほとんどなく、家の中でも別の言語を用いるようになって来ていて、流暢にドマーキ語を話せる者は百人を切っているように見受けられる。たった2つの集落だけに残存した、そして、ひっそりと消えて行っている言語である。

言語は一度消滅してしまうと、痕跡らしい痕跡が残らない。だからこそ、言語学者による精密な文法記述、テキスト保存、語彙収集、そして音声・映像などによるメディア記録が、生物でいう化石の代わりになるのである。言語保存・言語維持などと言って、話者達が望んでいないのに言語を使わせ続ける様な不自然な真似はするべきではない。そうではなく、いつでも再生可能なように情報をなるべく多く保管するという方向性で進める研究が、今は重要な仕事となるであろう。

ブルシャスキー語を話すドマ人の小学生たち（2012年10月、フンザ谷モミナバード村）。

「同じ眼」の重要性

第二のなすべきことは、各言語の方言踏査である。1つの言語の幾つもの変異を記述するのは、1人の研究者が行った方が良いと筆者は考える。当然ながら、作業効率の面から言えばチームを組んで一斉に調査に出た方が能率的ではあるが、一個人の「同じ眼」で言語を見て記した方が、記述の統一性や方言間対比の一貫性などを考慮すると、優れている部分が大きいと考えられる。

現在調査している3つの言語は、分布に関しては対蹠的である。ブルシャスキー語は比較的遠く隔たった3つの飛び地エリアで話されている。ドマーキ語は歩いて4時間程度の距離で離れた2つの集落だけで話されている。一方で、シナー語は割合に連続した広大なエリアで話されている言語である。どの言語も、方言変異があるのはすでに確認済みであるが、徹底調査には踏み出せていない。方言踏査ということで考えてみると、シナー語のように連続した分布の方が、却って目途が立て難い部分がある。その方法論の摸索なども含め、これが今後、進めて行くべき課題の1つである。

多層性の腑分け

最後の1つは、多重的な地域特性の解体である。上に述べた通り、言語領域的な地域特有の共通特徴というのは、大小さまざまな勢力が重なり合って実現している。そうなると、個別言語の元来的な性質を見出す為には、幾重にも覆っている地域性のヴェールを剝がなければならなくなる。

ここまでは確定的に述べて来たが、実はこの地域の言語の系譜は、厳密に統一見解が成立している訳ではない。ここでインド語派北西グループとして紹介した言語群は、旧来、ダルド語群と呼ばれて来ていたグループで、近年までインド語派に含まれるか否かすら

定かではなかった。ドマーキ語が中央グループであるとしているのも、筆者はそう確信しているというだけで、ダルド語群に含める記述も少なくはない。カティ語が属するヌーリスタン語派も、インド・イラン語派に含まれるのは確かであろうが、その下で何処に位置しているかのコンセンサスはない。研究の進んでいる筈のインド・ヨーロッパ語族の言語なのに、これらの言語の位置付けがこんなにもあやふやなのは、この地域の言語研究が進んでいない為であり、しかも、地域的特徴か系統的特徴かの判別も曖昧なままだったからである。だからこそ、多重地域性の影響を腑分けして、各言語の中核的な姿を明らかにすることが肝要なのである。

そしてこれは、ブルシャスキー語の正体探しにも大切なことである。何がブルシャスキー語的な特徴であるのかを明確にすることで、濫立する「系統関係の証明」を排除するのにも一役買うであろう。或いは、そこから正しい「証明」を見出して、本当の帰属先が見付かったならば、それこそ僥倖である。

南アジア言語連合に関しては研究が多いが、パキスタン北部のそれに関してはほとんどない。最近になって漸く少しずつ解明が始まって来たところである。しかも、或る何かがこの地域の特徴であるということを言うには、その周囲の、その特徴を有していない言語までを視野に入れて示さなければならない。当然ながら、地域的に属している言語全てが、地域特徴の全てを備えている訳でもない。1つの言語連合自体が、すでに多層性を秘めているのである。そして、そういった細かな特性の全てを闡明して行くには、個別言語の微に入り細を穿った記述文法が必要となって来る。即ち、この研究を達成するには、3つなどと言わず、パキスタン北部やその周辺に分布しているより多くの言語の、より精確な記述をして行く必要があるということであり、これに関しては、独力で果たすには一生に与えられた時間があまりにも短過ぎる。糅てて加えて、この世界の屋根には多くの系統の言語が集っているのである。いずれもが系統的に近い言語であれば、次々と調査対象を広げて行くのも比較的容易であったかも知れない。多様なのに一様である部分が面白いのだが、多様であるが為に一筋縄では行かない、というのもまた実情なのである。

（左から）ブルシャスキー語話者、パシュトー語話者２名、筆者、シナー語話者（2014 年 8 月、ギルギット市）。

現地では子供でもペラペラと喋っているのに、研究対象としては一を知ると十は分からなくなる、というのが言語というものの持つ深さであり、魅力でもある。言語を知ることは人を知ることにも通じ、文化を知ることにも通じる。だからこそアメリカの人類学では、言語学をその下位分野の１つに数えているのであろう。さて、こんなにも魅力的な状況であるパキスタン北部で、そんなにも魅力的である言語研究に、誰か新しく参入してくれないものかと切に切に願っているのだが。

【参考文献】

Bailey, T. Grahame. 1924. *Grammar of the Shina (Ṣiṇā) Language*. London: The Royal Asiatic Society.

Berger, Hermann. 1998. *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik; Teil II: Texte mit Übersetzungen; Teil III: Wörterbuch*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Biddulph, J. 1880. *Tribes of the Hindoo Koosh*. (Reprinted in 1999, Lahore: Vanguard Books.)

Cunningham, Alexander. 1854. *Ladák. Physical, Statistical, and Historical; with Notices of the Surrounding Countries*. (Reprinted in 1977, New Delhi: Sagar Publications.)

Lorimer, D.L.R. 1935–38. *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar; vol.II: Texts and Translations; vol.III: Vocabularies and Index*. Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).

—— 1939. *The Ḍumāki Language. Outlines of the Speech of the Ḍoma, or Bērīcho, of Hunza*. Nijmegen: Dekker & van de Vegt N.V.

Schmidt, Ruth Laila and Razwal Kohistani. 2008. *A Grammar of the Shina Language of Indus Kohistan* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

よしおか のぼる

国立民族学博物館民族社会研究部助教。専門はフィールド言語学、ブルシャスキー語。南アジア、特にパキスタン北部の言語に関して現地調査を行っている。『事典 世界のことば 141』（梶茂樹他編 大修館書店 2009 年）、『世界の文字事典』（庄司博史編 丸善出版 2015 年）などで項目を担当しているほか、論文などを多数執筆。